

日蓮大聖人御書全集

しよほうじつそうしよ

諸法実相抄

新版
1788
ゝ
1793

諸法実相抄

ぶんえい ねん がつ にち さい さいれんぼう
文永 10 年 ('73) 5 月 17 日 52 歳 最蓮房

にちれん しる
日蓮これを記す。

と い ほうきよう だいいち ほうべんぼん い しょうほうじつしょう
問うて云わく、法華經の第一の方便品に云わく「諸法実相
ないしほんまつくきようとう うんぬん きようもん こころ
乃至本末究竟等」云々。この經文の意いかん。

こた い しもじごく かみぶつかい じっかい えしょう
答えて云わく、下地獄より上仏界までの十界の依正の
とうたい いっぱう 残 みようほうれんげきよう 相

きようもん
という經文なり。

えほう かなら しょうほうじゅう しやく い
依報あるならば、必ず正報住すべし。釈に云わく

えほう しょうほう つね みようきよう の どううんぬん い じっそう

「依報・正報、常に妙經を宣ぶ」等云々。また云わく「実相

かなら しょうほう しょうほう かなら じゅうによ じゅうによ かなら じっかい じっかい

は必ず諸法、諸法は必ず十如、十如は必ず十界、十界

かなら しんど うんぬん い あび えしょう まった ごくしょう

は必ず身土」云々。また云わく「阿鼻の依正は全く極聖

じしん しょ びる しんど ぼんげ いちねん こ うんぬん

の自心に処し、毘盧の身土は凡下の一念を逾えず」云々。

しやくぎふんみよう たれ ぎもう しょう

これらの釈義分明なり。誰か疑網を生ぜんや。

ほうかい 相 みようほうれんげきよう ごじ 変

されば、法界のすがた、妙法蓮華經の五字にかわること

しゃか たほう にぶつ みようほうとう ごじ ゆう

なし。釈迦・多宝の二仏というも、妙法等の五字より用の

りやく ほどこ たも とき じそう にぶつ あらわ ほうとう なか

利益を施し給う時、事相に二仏と顕れて、宝塔の中にし

額 あ たも とう ほうもん にちれん のぞ

てうなずき合い給う。かくのごとき等の法門、日蓮を除い

もう い ひと いちにん

てんだい みようらく でんぎよう

ては申し出だす人、一人もあるべからず。天台・妙楽・伝教

とう こころ し たま ことば い たも

等は、心には知り給えども、言に出だし給うまではなし、

むね なか 暮 たま どうり ふぞく ゆえ

胸の中にしてくらし給えり。それも道理なり。付嘱なきが故

とき 至 ゆえ ほとけ くおん でし

に、時のいまだいたらざる故に、仏の久遠の弟子にあらざ

ゆえ じゆ ぼさつ なか じようしゆしやうどう じようぎやう むへんぎやうとう

る故に。地涌の菩薩の中の上首唱導、上行・無辺行等の

ぼさつ ほか まつぼう はじ ごひやくねん しゆつげん ほつたい

菩薩より外は、末法の始めの五百年に出現して、法体の

みようほうれんげきやう ごじ ひろ たも ほうとう なか にぶつ

妙法蓮華經の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏

びようざ ぎしき つく あらわ ひと すなわ ほんもんじゆりやうほん

並座の儀式を作り顕すべき人なし。これ即ち本門寿量品

じ いちねんさんぜん ほうもん ゆえ

の事の一念三千の法門なるが故なり。

されば、釈迦・多宝の二仏というも用の仏なり。

みようほうれんげきよう

ほんぶつ

おわ

そうら

きよう

い

妙法蓮華經こそ本仏にては御座しまし候え。經に云わく

によらい

ひみつ

じんつう

ちから

によらい

ひみつ

たい

「如来の秘密・神通の力」、これなり。「如来の秘密」は体

さんじん

ほんぶつ

じんつう

ちから

ゆう

さんじん

の三身にして本仏なり、「神通の力」は用の三身にして

しゃくぶつ

ほんぶ

たい

さんじん

ほんぶつ

ほとけ

ゆう

迹仏ぞかし。凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の

さんじん

しゃくぶつ

しゃかぶつ

われ

しゅじよう

三身にして迹仏なり。しかれば、釈迦仏は我ら衆生のた

しゅ

し

しん

さんとく

そな

たも

おも

そうら

めには主・師・親の三徳を備え給うと思ひしに、さにては候

かえ

ほとけ

さんとく

被

たてまつ

ほんぶ

わず、返つて仏に三徳をかぶらせ奉るは凡夫なり。その

ゆえ

によらい

てんだい

しゃく

によらい

じつぼうさんぜ

故は、如来というは、天台の釈に「如来とは、十方三世の

しよぶつ にぶつ さんぶつ ほんぶつ しゃくぶつ つうじう はん たま
諸仏、二仏、三仏、本仏・迹仏の通号なり」と判じ給えり。

しゃく ほんぶつ ほんぶ しゃくぶつ
この釈に「本仏」というは凡夫なり、「迹仏」というは仏 ほとけ

なり。しかれども、迷悟の不同にして生・仏異なるによつ めいご ふどう しょう ぶつこと

て俱体俱用の三身ということをば衆生しらざるなり。 くたいくよう さんじん しゅじよう 知

さてこそ、諸法と十界を挙げて実相とは説かれて候え。 しょう じっかい あ じっそう と そうら

実相というは、妙法蓮華經の異名なり。諸法は妙法蓮華經 じっそう みようほうれんげきよう いみよう しょう みようほうれんげきよう

ということなり。地獄は地獄のすがたを見せたるが実の相 じごく じごく 相 み じつ すがた

なり。餓鬼と変ぜば、地獄の実のすがたにはあらず。 ほとけ がつ へん じごく じつ ほとけ
餓鬼と變ぜば、地獄の実のすがたにはあらず。 仏は

仏のすがた、 凡夫は凡夫のすがた、 万法の当体のすがたが ほとけ ほんぷ ほんぷ ばんぼう とうたい

みようほうれんげきよう とうたい

しよほうじつそう もう

妙法蓮華經の当体なりということをしよほうじつそうを、諸法実相とは申すな

てんだい

じつそう

じんり

ほんぬ

みようほうれんげきよう

うんぬん

り。天台云わく「実相の深理、本有の妙法蓮華經」云々。

しゃく

みころ

じつそう

みようごん

しゃくもん

ぬし

ほんぬ

この釈の意は、実相の名言は迹門に主づけ、本有の

みようほうれんげきよう

ほんもん

かみ

ほうもん

しゃく

よ

妙法蓮華經というは、本門の上の法門なり。この釈、能く

よ

しんちゆう

あん

たま

そうら

能く心中に案じさせ給え候え。

にちれん

まつぼう

う

じようぎようぼさつ

ひろ

たも

日蓮、末法に生まれて、上行菩薩の弘め給うべきところ

みようほう

さきだ

弘

作

顕

たも

の妙法を先立ってほぼひろめ、つくりあらわし給うべき

ほんもんじゆりようほん

こぶつ

しゃかぶつ

しゃくもんほうとうほん

ときゆじゆつ

たも

本門寿量品の古仏たる釈迦仏、迹門宝塔品の時涌出し給

たほうぶつ

ゆじゆつぽん

ときしゆつげん

たも

じゆ

ぼさつとう

つく

う多宝仏、涌出品の時出現し給う地涌の菩薩等をまず作り

あらわ たてまつ

よ ぶんざい

にちれん

頭し奉ること、予が分齊にはいみじきことなり。日蓮を

憎

ないしよう

およ

こそにくむとも、内証にはいかが及ばん。されば、かかる

にちれん

しま

おんる

つみ

むりようこう

消

日蓮をこの島まで遠流しける罪、無量劫にもきえぬべしと

おほ

ひゆほん い

つみ と

こう

きわ

も覚えず。譬喩品に云わく「もしその罪を説かば、劫を窮む

っ

にちれん

くよう

にちれん

とも尽きじ」とは、これなり。また日蓮を供養し、また日蓮

でしだんな

たも

くどく

ほとけ

ちえ

が弟子檀那となり給うこと、その功德をば仏の智慧にても

量 っ

たも

きよう

い

ほとけ

ちえ

はかり尽くし給うべからず。経に云わく「仏の智慧をも

たしよう

ちゆうりよう

ほとり

え

い

つて多少を籌量すとも、その辺を得じ」と云えり。

じゆ

ぼさつ

先 駆

にちれんいちにん

じゆ

ぼさつ

かず

地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人なり。地涌の菩薩の数に

もや入りなまし。いもし日蓮、地涌の菩薩の数に入らば、あ

にちれんでしだんな じゆるるい きようい

に、日蓮が弟子檀那、地涌の流類にあらずや。経に云わく

よひとり ほけきようないしいつく と

「能くひそかに一人のためにも、法華経の乃至一句を説か

まさし ひとすなわ によらいつか によらい

ば、当に知るべし、この人は則ち如来の使いにして、如来

つか によらい じ ぎよう べつじん と たも

に遣わされて、如来の事を行ず」。あに別人のことを説き給

うならんや。

あま ひと われ 褒 とき

されば、余りに人の我をほむる時は、いかようにもなり

こころ しゆつたい そうろう ことば

たき意の出来し候なり。これ、ほむるところの言より

起 そうろう まつぼう う ほけきよう ひろ ぎようじや

おこり候ぞかし。末法に生まれて法華経を弘めん行者は、

さんるい てきじん あ るざい しざい およ 堪え

三類の敵人有つて流罪・死罪に及ばん。しかれども、たえ

ひろ もの ころも しゃかぶつ 覆 たも

て弘めん者をば、衣をもつて釈迦仏おおい給うべきぞ、

しよてん くよう 肩 懸 背 中 負

諸天は供養をいたすべきぞ、かたにかけせなかにおうべき

だいぜんこん もの いっさいしゅじよう だいどうし

ぞ、大善根の者にてあるぞ、一切衆生のためには大導師に

しゃかぶつ たほうぶつ じつぽう もろもろ ぶつぼさつ てんじん

であるべしと、釈迦仏・多宝仏・十方の諸の仏菩薩・天神

しちだいちじんごだい かみがみ きしもじん じゅうらせつによ しだいてんのう ぼんてん

七代地神五代の神々・鬼子母神・十羅刹女・四大天王・梵天・

たいしやく えんまほうおう すいじん ふうじん さんじん かいじん だいにちにようらい ふ

帝釈・閻魔法王・水神・風神・山神・海神・大日如来・普

げん もんじゅ にちがつとう しょそん 褒 たてまつ むりよう

賢・文殊・日月等の諸尊たちにほめられ奉るあいだ、無量

だいなん かにん そうろう わ み そん

の大難をも堪忍して候なり。ほめられぬれば我が身の損

顧

謗

とき

わ み

破

ずるをもかえりみず、そしられぬる時はまた我が身のやぶ

知

振

舞

ぼんぷ

事

業

るるをもしらずふるまうことは、凡夫のことわざなり。

こんど しんじん

致

ほけきよう

ぎようじや

通

いかにも、今度、信心をいたして、法華經の行者にてとお

にちれん

いちもん

たも

にちれん

どうい

り、日蓮が一門となりとおし給うべし。日蓮と同意ならば

じゆ

ぼさつ

じゆ

ぼさつ

定

しやくそん

地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩にさだまりなば、釈尊

くおん

でし

うたが

きよう

い

われ

久遠の弟子たること、あに疑わんや。經に云わく「我は

くおん

このかた

しゆ

きようけ

まつぼう

久遠より来、これらの衆を教化せり」とは、これなり。末法

みようほうれんげきよう

ごじ

ひろ

もの

なんによ

嫌

にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は、男女はきらうべか

みなじゆ

ぼさつ

しゆつげん

とな

だいもく

らず、皆地涌の菩薩の出現にあらずんば唱えがたき題目な

にちれんいちにん

なんみようほうれんげきよう

とな

ににん

り。日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱えしが、二人・

さんにん

ひやくにん

しだい

とな

伝

みらい

三人・百人と次第に唱えつたうるなり。未来もまたしかる

じゆ

ぎ

こうせんるふ

べし。これ、あに地涌の義にあらずや。あまつさえ、広宣流布

とき

にほんいちどう

なんみようほうれんげきよう

とな

だいち

の時は、日本一同に南無妙法蓮華經と唱えんことは、大地を

まと

的とするなるべし。

ほけきよう

な

立

み

任

たも

ともかくも法華經に名をたて身をまかせ給うべし。

しゃかぶつ

たほうぶつ

じつぼう

もろもろ

ぶつぼさつ

こくう

にぶつ

釈迦仏・多宝仏・十方の諸の仏菩薩、虚空にして二仏

額

あ

さだ

たま

べち

うなずき合い、定めさせ給いしは別のことにはあらず。た

まつぼう

りようぼうくじゆう

ゆえ

すで

たほうぶつ

はんざ

だひとえに末法の令法久住の故なり。既に、多宝仏は半座

わ　しやかによらい　たてまつ　たま　とき　みようほうれんげきよう　はた

を分かちて釈迦如来に奉り給いし時、妙法蓮華經の幡を

差　あらわ　しやか　たほう　にぶつ　たいしよう　定　たま

さし顕し、釈迦・多宝の二仏、大将としてさだめ給いし

偽　わ　しゅじよう

こと、あにいつわりなるべきや。しかしながら我ら衆生を

ほとけ　ごだんごう

仏になさんとの御談合なり。

にちれん　ざ　じゆう　そうら　きようもん　み　そうろう

日蓮はその座には住し候わねども、經文を見候にす

曇　ざ　ぼんぷ

こしもくもりなし。またその座にもやありけん。凡夫なれ

かこ　知　げんざい　み　ほけきよう　ぎようじや

ば過去をしらず。現在は見えて法華經の行者なり。また

みらい　けつじよう　とうけいどうじよう　かこ

未来は決定として当詣道場なるべし。過去をもこれをも

すい　こくうえ　さんぜかくべつ

って推するに、虚空会にもやありつらん。三世各別あるべ

からず。

かくのごとく思いつづけて候えば、おも 続 そちら るにん きえつ流人なれども喜悦

はかりなし。計 無 嬉 涙 辛うれしきにもなみだ、つらきにもなみだなり。

涙は善惡に通ずるものなり。なみだ ぜんあく つう か せん にん あらかん ほとけ彼の千人の阿羅漢、仏のこ

とを思いいでて涙をながし、おも 出 なみだ 流ながしながら文殊師利菩薩は

妙法蓮華經と唱えさせ給えば、みようほうれんげきよう とな たま せん にん あらかん なか千人の阿羅漢の中の

阿難尊者は、あなん そんじや 泣なきながら「如是我聞によぜがもん（かくのごときを我聞き

き）」と答え給う。こた たも よ きゆうひやくきゆうじゆうきゆうにん余の九百九十九人は、なくなみだ

を硯の水として、すずり みずまた「如是我聞によぜがもん うえ みようほうれんげきよう」の上に「妙法蓮華經」

書 付

いま にちれん

み

とかきつけしなり。今、日蓮もかくのごとし。かかる身と

みようほうれんげきよう

ごじしちじ

ひろ

ゆえ

しやかぶつ

なるも、妙法蓮華經の五字七字を弘むる故なり。釈迦仏・

たほうぶつ

みらいにほんこく

いつさいしゆじよう

留

置

たも

多宝仏、未来日本国の一切衆生のためにとどめおき給うと

みようほうれんげきよう

われ

き

ゆえ

ころの妙法蓮華經なりと、かくのごとく我も聞きし故ぞか

し。

げんざい

だいなん

おも

続

涙

みらい

じようぶつ

おも

現在の大難を思いつづくるにもなみだ、未来の成仏を思

よろこ

涙

塞

敢

とり

むし

鳴

つて喜ぶにもなみだせきあえず。鳥と虫とはなけども

涙

落

にちれん

泣

隙

なみだおちず。日蓮はなかねどもなみだひまなし。このな

せけん

ほけきよう

ゆえ

みだ世間のことにはあらず。ただひとえに法華經の故なり。

かんろ

い

ねはんぎよう

もししからば甘露のなみだとも云いつべし。涅槃経には、

ふぼ きようだい さいし けんぞく 別 なが なみだ

父母・兄弟・妻子・眷属にわかれて流すところの涙は

しだいはい みず 多 ぶつぽう いってき

四大海の水よりもおおしといえども、仏法のためには一滴

溢 み ほけきよう ぎようじゃ かこ

をもこぼさずと見えたり。法華経の行者となることは過去

しゆくじゆう おな そうもく ほとけ 作 しゆくえん

の宿習なり。同じ草木なれども仏とつくらるるは宿縁

ほとけ ごんぶつ しゆくじゆう

なるべし。仏なりとも権仏となるは、また宿業なるべし。

ふみ にちれん だいじ ほうもん 書 そうろう

この文には日蓮が大事の法門どもかきて候ぞ、よくよ

み 解 たま こころう たも

く見ほどこせ給え、意得させ給うべし。

いちえんぶだいだいichi ごほんぞん しん たま 相 構

一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給え。あいかまえて、

あいかまえて、しんじん 強 信心つよく候いて、三仏の守護をこうむら

せ給うべし。たも

ぎようがく にどう

励

そうろう

ぎようがく 絶

ぶつぼう

行学の二道をはげみ候べし。行学たえなば仏法はあ

われ

ひと

きようけそうら

ぎようがく

しんじん

るべからず。我もいたし、人をも教化候え。行学は信心よ

起

そうろう

ちから

いちもんいつく

語

たも

りおこるべく候。力あらば一文一句なりともかたらせ給

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

きようきようきんげん

うべし。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。恐々謹言。

ごがつじゅうしちにち

にちれん

かおう

五月十七日

日蓮

花押

お

もう

そうろう

にちれん

そうじよう

ほうもんとう

さきざき書

まい

追つて申し候。日蓮が相承の法門等、前々かき進ら

そうら

ふみ

だいじ

こと

記

進

せ候いき。ことにこの文には大事の事どもしるしてまいら

そうろう

ふしぎ

けいやく

ろくまんごうじゃ

じようしゅ

じようぎよう

せ候ぞ。不思議なる契約なるか。六万恒沙の上首・上行

とう しぼさつ へんげ

定

故

そう

にちれん み

等の四菩薩の变化か。さだめてゆえあらん。総じて日蓮が身

あ

ほうもん 渡

そうろう

にちれん

に当たつての法門わたしまいらせ候ぞ。日蓮、もしや

ろくまんごうじゃ

じゅ

ぼさつ

けんぞく

六万恒沙の地涌の菩薩の眷属にもやあるらん。

なんみようほうれんげきよう

とな

にほんこく

なんによ

導

南無妙法蓮華経と唱えて、日本国の男女をみちびかんと

思

きよう

い

いち

じようぎよう

な

ないしししようどう

おもえばなり。経に云わく「二に上行と名づく乃至唱導

し

と

そうら

しゆくえん

追

の師なり」とは説かれ候わぬか。まことに宿縁のおうと

よ でし

たも

ふみ

相

構

ひ

たま

ころ、予が弟子となり給う。この文あいかまえて秘し給え。

にちれん

こしよう

ほうもんと書

付

そうろう

止

お

日蓮が己証の法門等かきつけて候ぞ。とどめ畢わんぬ。

さいれんぼうごへんじ
最蓮房御返事